

大山家住宅は裕福な地主の家であり、1800年代半ばの秋田の上流階級の農家住宅の素晴らしい典型例である。1973年に国指定重要文化財に指定されたこの家には、多くの興味深い建築上の特徴がある。その一つが、屋根の棟中央部に沿って野芝が生えていることだ。これは、降雨を吸収するためであり、屋根地が接する部分の隙間から降雨が浸透して、屋根の寿命を野芝が延ばしていたのである。この家には、屋内に馬小屋もある。

大山家住宅は、一つまたは複数の翼（中門）が外の通路で主屋とつながっているのが特徴のL字型をした中門づくりという構造の建物である。住居は3つの空間に分かれており、江戸時代（1603～1867）の厳格な階級制度がその配置に反映されている。1つは、使用人と農夫が暮らす空間で、彼らは馬小屋の階上で寝ていた。主屋は家族のための空間で、主屋には客を受け入れるための部屋もあった。右側にある中門という別棟には部屋がいくつかあるが、ここは、年に数回、近くの檜山城の領主が旅行中に滞在するために用意されていた。中門には専用の入り口が設けられ、賓客への配慮がなされている。

この家が使われていたとき、家の床より低くつくられた炉床（囲炉裏）に火をとますと、その煙が湿気を取り除き、害虫を寄せつけないため、茅葺き屋根を守るのに役立っていた。この家には1980年頃から居住者がいなかったため、屋根は以前よりも早く腐敗が進んでいる。現在、茅葺き屋根は15年から20年ごとに葺き替える必要があるが、葺き替え工事の技術を持った職人はほとんどいない。

ある変わった出来事がなければ、私たちは大山家住宅の歴史についてもっと良く知ることが出来たかもしれない。この家の元の所有者は健康状態が悪かったのだが、それについてある占い師が、古い物に囲まれて暮らしていることがその原因であると言った。その結果、この家の所有者は、家に関連する多くの品や記録を燃やしてしまったのである。